

人生の最期は聖芳園で・・・

看取り介護を通して学んだそれぞれの最期とは

北広島市高齢者総合ケアセンター

特別養護老人ホーム聖芳園

主任ソーシャルワーカー 畑中 宏之

聖芳園 施設概要

開設 昭和49年4月1日

入所定員 100名 ショートステイ15名

平均要介護度 3.7

従来型個室と多床室ありの従来型特養

ケアワーカー 47名

看護師 5名

ソーシャルワーカー 3名



以前までの聖芳園の取り組み

経口から食事を摂取することができなくなる。



経管栄養を行なう。

点滴での栄養管理を行なう。



最期は医療機関で迎える方がほとんどであった。

取り組みを変えるきっかけ

入居者本人・ご家族から
「誰も知っている人のいない病院ではなく、人生の最期は聖芳園で迎えたい。(迎えさせてあげたい)」
という声があった。

職員の中でも
「こんなに長く入居している方や聖芳園を選んでくれた方を最期まで看取りたい。」
という思いが募っていった。

聖芳園で看取り介護を行なうためには

- ・職員間の意識の統一
 - ・職種によって異なる経験の差
 - ・医療機関との連携 をクリアしなければ行えない。
- 以前から分かっていたことではあるが、あと一歩が踏み出せずにいた。

看護師長の「出来ないかもしれないけど、とにかくやってみよう。何もしないよりはいいでしょ。」の一声で職員も立ち上がる。

聖芳園で行なったこと

- 職種間で何度も研修、話し合いを行ない、それぞれの考え方や思いをぶつけあった
- 看取り介護を実施している他の特養へ見学に行き、情報交換を行なった。
- 看取り介護準備委員会を立ち上げマニュアルの作成を行なった。
- 医療機関への協力依頼。

いざ、看取り介護実施へ

- ・職員間で様々な疑問や不安が生まれる
 - いつまで食事を提供するの？
 - 点滴は一切行わないの？
 - 痛みや苦しみを伴う場合はどうするの？
 - ご家族にはどのように協力してもらうの？

疑問や不安

食事はいつまで提供するの？



- ・その方の状態に合わせて提供する量を調整したり、好むものを提供する。
- ・経口からの摂取量が少なくなることで唾液の量が減るため、口腔ケアをこまめに行なう必要あり。

疑問や不安

点滴は一切行わないの？



- ・経口摂取が減少した場合の点滴は原則行わないが、数日間の点滴により回復の見込みがあると医師が判断し、ご本人・ご家族が了承した場合は点滴を行なう。
- ・ご家族が看取りの決断に迷う場合は一時的に行なうこともあり。

疑問や不安

痛みや苦しみを伴う場合はどうするの？



- ・主治医等に相談し、ご本人が辛い思いをしないよう痛みや苦しみの緩和を行なう。
- ・場合によっては緩和ケアを行なっている医療機関と連携する。

疑問や不安

ご家族へはどのように協力してもらおうの？



- ・ご本人についてのエピソードを聞いたり、写真や馴染みのある物を持参していただく。
- ・職員から、ご本人の状態についてこまめにお伝えし、ご家族のお話に耳を傾け心配事や不安な気持ちを受け止める。

そこで気が付いたこと

- ・聖芳園で看取ること＝
ご本人、ご家族のための看取り介護？
- ・聖芳園で看取ることだけがその方の最期と言えるのか？

・入居者それぞれの思う最期の迎え方があるはず。

それぞれの最期への支援

- 好きな物を食べたい。
→寿司やビールを提供。(味や匂いだけでも感じていただく。食べられなければ、家族に食べていただく。)



それぞれの最期への支援

- ・いつもの父、母でいてほしい。
→以前好んで着ていた、着物やスーツを用意していただき、旅立ちの時に着ていただく。



それぞれの最期への支援

- 家族と一緒に最期を迎えたい。
 - 一時帰宅のお手伝いや居室に家族が過ごせるスペースを提供。家族の写真をご本人の見えるところに掲示。
- 癌があり、痛みもあるが病院は嫌だ。
 - 緩和ケア医療機関と連携しながら、痛み等の緩和を行ないながら、亡くなる当日まで施設で過ごした。

看取り介護を経験してみても

- ・看取り介護開始から2年で10名以上の入居者を聖芳園で看取ることができた。
- ・職員の死に対する不安も経験を通して、少しずつ軽減できている。
- ・その方らしい生活についてあらためて考える機会ができ、職員一人一人がその方のために今出来ることは何かについて考えるようになった。

看取り介護を受けた家族の声

- 皆さんの温かい介護で父は本当に毎日が楽しかったことと思います。自然な形を望んでいましたが、父は素晴らしい思い出をいっぱい持って旅立つことができました。

(100歳男性入居者の娘様より) 《本文のまま》

- 家族ならどこまで出来たかと思うと、母も十分満足し喜んでいると思います。私自身も母みたく老後を過ごせ、お世話になることがありましたら、穏やかに看取り介護をお願いしたいと思いました。

(98歳女性入居者の娘様より) 《本文のまま》

看取り介護を受けた家族の声

- 本当のところ、母の所に行くのが辛い時もありましたが、職員の方々の優しさ、力強さ、プロ意識の高さに引っ張られるように通うことができました。逃げて目をつむってしまおうという私の心を引き戻してくれ、提案や考える時間を与えていただき、「後悔のないように」は何度伝えられたことでしょうか。ある意味家族よりも母に寄り添っている、これを専門性というのだなと思いました。


(86歳女性入居者の娘様より) 《本文のまま》

成果と評価

- ・看取り介護は特別なことを行なっているのではなく、個別ケアの延長線上にあるということ。
- ・聖芳園で看取ることだけが、ご本人のためになるのではなく、入居者それぞれに最期の迎え方があるということ。
- ・その時だけでなく、その後の家族へのケアを行なうことが今後の地域とのつながりともなるということ。

今後の課題

- ・ご家族の手紙にあった、「親とはいえ、自分以外の人間の生命に係る事柄を本人以外の自分が決めてしまっても良いのか」という思いをどの家族も持っていることを職員が常に意識しながら関わっていく。
- ・看取り経験の少ない職員についての教育。
- ・経管栄養を行なっている方の看取り。



いろいろと課題はありますが、
笑顔を忘れずこれからもできることから
みんなで取り組んでいきたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。